

地域に信頼される魅力ある学校づくり

－学校支援ボランティアの活用から－

長期研修員 植 嶋 紀 一

Ueshima Norikazu

要 旨

昨年度、置籍校では、地域住民が教育活動や環境整備等の支援を行う学校支援ボランティアを活用し、魅力ある学校づくりに取り組んだ。しかし、現在のところ、十分な計画性をもって事業を展開しているとは言えない状況にある。そこで、学校支援ボランティア導入の手順や問題点を明らかにしながら、恒常的・日常的に活用する方途を研究し、魅力ある学校づくりについて検討した。

キーワード： 魅力ある学校、開かれた学校、学校支援ボランティア、地域の教育力

1 はじめに

変化の激しい時代を迎え、これからの学校では、学校の自主性・自律性を基盤に家庭や地域社会との信頼関係を深めながら、児童にとって行きたくてたまらない学校にすることはもちろんのこと、保護者にとっても児童を通わせたい学校、地域にとっては誇りに思える学校という、「魅力ある学校」をつくるのが重要である。そのため、各学校では独自に創意工夫しながら、特色ある教育活動の展開に力を注いでいる。豊かな経験、専門的な知識や技能などを有する地域住民に、児童の学習活動を支援していただく学校支援ボランティアの導入は、こうした教育活動の展開に大いに役立つものである。

2 研究目的

学校教育に対する保護者や地域の期待や関心が多様化していく中で、地域住民が豊かな経験、専門的な知識や技能などを発揮し、教育活動や環境整備等の支援を行う学校支援ボランティアを活用することで、特色ある教育活動を展開しながら、魅力ある学校づくりの在り方を考察する（図1）。

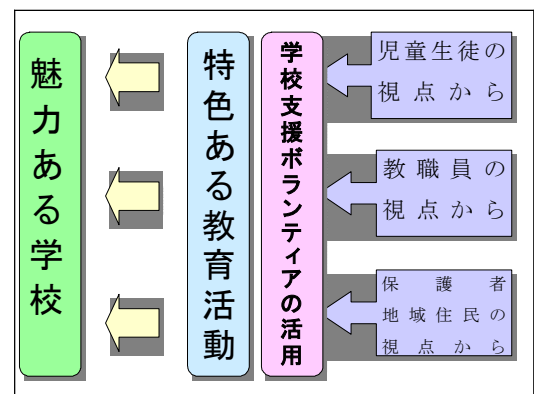


図1 魅力ある学校づくりの考え方

3 研究方法

- (1) 学校支援ボランティアの現状と課題について、先行事例の収集と分析をする。
- (2) 学校支援ボランティアの在り方を考察する。
- (3) 学校支援ボランティアを効果的に活用するために、置籍校をモデルとして組織作りをする。

4 研究内容

- (1) 学校支援ボランティアの現状と課題

小学校学習指導要領の「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」では、「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。」とあり、各学校には、地域の教育力を学校教育の場に生かす様々な工夫が求められている。また、生涯学習審議会答申（平成11年6月9日）では、生涯学習の成果を生かす活動の場づくりの一つとして、学校支援ボランティアの推進を挙げている。

最近では、教科指導での基礎的な学習の補助や、コンピュータ操作の指導にも、地域の人々による学校支援ボランティアの協力が見られる。さらに、学校図書館運営の補助や、総合的な学習の時間や生活科の体験活動における、安全確保のための学校支援ボランティアも増えている。置籍校における昨年度の事例の一つを挙げる。4年生の総合的な学習の時間で、「命とくらしをささえる水」の授業に学校支援ボランティアを招き「水生昆虫を探そう」をテーマに学習した（写真1）。



写1 水生昆虫を探そう

こうした事例は、児童の学習をより豊かなものにしようという学校側の願いを基に、地域の人材の活用を進めてきた一つの現れである。

しかし、学校支援ボランティアを効果的に活用するためには課題も多い。例えば、学校が学校支援ボランティアのよさを十分に生かし切れなかったり、学校支援ボランティアが自己の思いを出し過ぎ、学校側とトラブルを起こすという事象である。

こうしたトラブルについては、打合せの時間を十分確保したり、各々の教育活動に適した人選を行ったりすることで解決が図れると考える。

(2) 学校支援ボランティアの在り方

地域の素材で学習したり、児童が学んだことを生活の中で生かせるような取組をすすめるために、地域の人々を学校支援ボランティアとして活用することで、よりゆきとどいた教育ができる。

教育活動や環境整備などの支援を行う学校支援ボランティアを「学校だより」などを通して、保護者だけでなく、学校評議員や地域住民にも協力を要請し、人材バンクとして登録する。また、県教育委員会や市教育委員会で募集している学校支援ボランティアを、教育活動の必要に応じて活用するため人材バンクに登録し充実を図っていく。

学習支援や教材作成補助、教育環境の整備や児童の安全確保のためにも学校支援ボランティアとして参加し、学校運営に寄与していただける人材も登録する。このことにより、保護者や地域の人々と児童との連帯感が生まれたり、学校支援ボランティアの学習意欲が喚起されるなど参加者自身にとっても価値あるものとなる。

また、円滑な実施のため、児童の個人情報など職務上知り得た情報に関しては守秘義務を負うということ、公教育の場に参加する以上、政治的、思想的に中立でなければならないことな

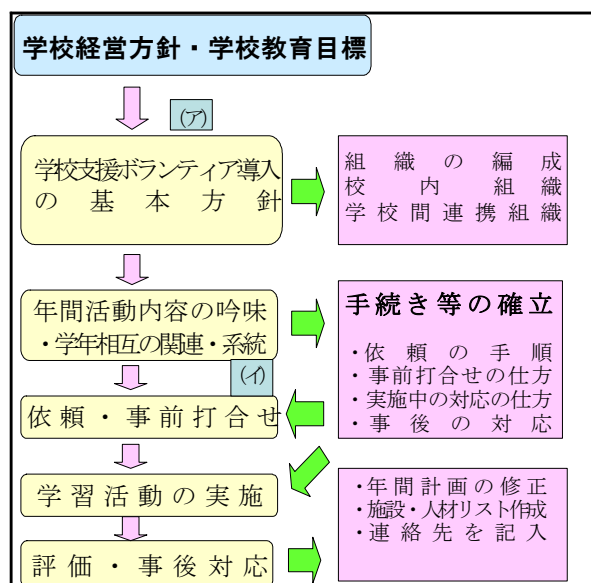


図2 導入の手順

どについては、事前打合せなどを通して、十分確認しておくことが必要である。

ア 学校支援ボランティア導入の手順（図2）

(ア) 学校教育目標の共通理解

学校ビジョンを明確にし、具体的な学校教育目標を基に、教科・領域、学年経営の方針とによって期待できる効果を再点検し、導入のねらいや方法、導入場面をまとめる。これを受けて、学校支援ボランティア導入の具体的な活動場面を検討し、年間活動計画の中に位置付けておけば、教科・領域との関連を明らかにでき、計画性のある活用となる。

(イ) 学校支援ボランティアの導入

学校支援ボランティアの実施に当たって、「依頼→学習活動→事後対応」における仕事内容や連絡系統、配慮事項等を記載したマニュアルを作る。特に、学校支援ボランティアとの打合せは不可欠で、その際、次の点を押さえることが大切である。

- ・学習計画を基に、学習のねらい、活動の全体的な流れと本時の流れを確認する。
- ・協力してもらう活動場면을具体的に話し合う。（活動場所で、打ち合わせると効果的である）
- ・必要な資料を検討する。（学校支援ボランティアが用意する資料は、直接担当教員が目を通す）
- ・児童の実態を的確に伝える。（理解力、これまでの積み上げ、興味・関心の傾向等）
- ・謝礼などに関する事項について明確にする。

(ウ) 効果や反省・改善点を積み重ねるための活動記録

学校支援ボランティアの導入を積み重ねていく上での資料となるよう、活動ごとの記録を残す（図3）。一つの活動に複数の学校支援ボランティアがいる場合、参加者全員の氏名と連絡先を記載しておく。クラブ活動や生活支援、読み聞かせなどのように継続して行われる学校支援については、1枚の用紙に一覧表として活動日や内容等を記載しておく。さらに、学校支援ボランティアの感想や学校側の反省を残し、次回の打合方法・実践方法や実践内容などの改善を図るとともに、次年度の導入を計画するときの参考にする。

学年実践記録 月 日 () 校時：記録者名			
教科・領域		単元名・活動名	
ねらい			
活動記録	(活動の流れ)		場所
	※学校支援ボランティアの導入場面を明示しておく。		資料
			準備
ボランティア側の感想		学校側の評価	
(※付せん可)		(反省・効果) (5段階評価を加える)	
ボランティア氏名		連絡先	

図3 実践記録用紙

イ 学校支援ボランティア導入にかかわる課題

(ア) 打合せ時間の調整

活動のねらいや流れ、児童の実態について学校支援ボランティアと打ち合わせることの重要性は承知しているが、その時間がなかなか確保できないという現状がある。その背景として、職員会議や校内研修などに時間が取られ、放課後に時間的余裕がないことが挙げられる。また、総合的な学習の時間や問題解決的な学習などでは、児童によって課題が異なるため必要な人材が異なってくるので、前もって準備するには時間が足りないことがある。

(イ) 学校支援ボランティアとの意識のずれ

学校支援ボランティアの指導内容が児童にとって難しいものであっても、児童の反応に気付かないで一方向的に教えてしまう場合がある。また、打合せで活動のねらいを伝えていても、実際の活動では学校支援ボランティアの思いが先行し、予定時間を超過してしまうことも多い。

(ウ) 学校側の不備による問題

学年主体で体験的な学習や問題解決的な学習に取り組むことが多く、同時期に同一の学校支援ボランティアを複数学年で必要とするなど学年間の調整ができていない場合が見られる。

(エ) その他

人材確保の問題、学校支援ボランティアへの報酬の問題、活動中のけがや事故に対する補償問題などがある。

(3) 学校支援ボランティアを効果的に活用するための組織作り

ア 学校支援ボランティア導入の意義を共通理解する場の設定

学校支援ボランティア導入を通して学校教育目標を効果的に具現化するには、校内研修等を活用し、学校支援ボランティア導入の意義について共通理解しておくことが必要である。

イ 学校運営組織の見直し

(7) 校内窓口になる係や委員会の設置

校内分掌の一つとして、学校支援ボランティア窓口を設置する。しかし、複数の仕事を兼務する煩雑な学校現場では、校務が重なり、動きがとれなくなることがある。

そこで、学年代表などで組織した窓口部署を設置する。総括責任者の下、各部署内で各学年の動向や導入後の活動評価など、簡単な文書による情報交換を行うと同時に、情報や資料の管理に協働できる体制を組む。

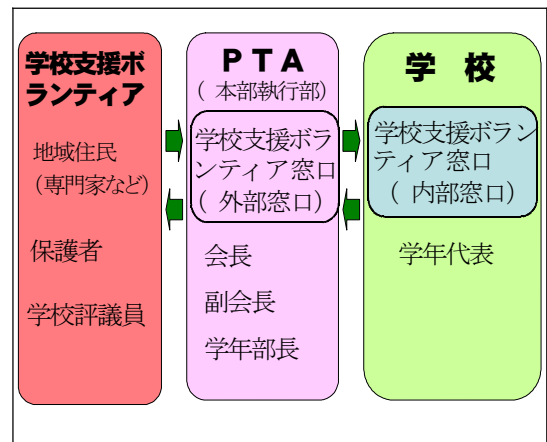


図4 外部窓口

(イ) 外部窓口としてPTAとの連携

学校外部の窓口も用意しておくことで、地域にある学習素材の発掘や人的資源の情報を得ることができる。そのためにも、PTAの協力は欠くことができない。PTAに学校外部の窓口(図4)としての役割を担ってもらう理由として、まず一つ目には、地域の生活者としての保護者をもつ情報を生かすことで、より多くの情報が得られること。二つ目には学校支援ボランティアの参加者が、PTAからの呼びかけということで、肩肘を張らずに参加できるということ。三つ目として、保護者と教員がそれぞれの立場を生かし、子育てに協力し合うというPTA本来の役割を果たせることが挙げられる。PTA(本部執行部)が、学校から依頼を受け、学校支援ボランティアを呼びかけ、共に学校教育活動を支援する中で保護者同士のネットワークが広がる。保護者同士が互いに知り合うことでPTA活動がより一層活性化することはもちろん、学校の教育活動にも活気が出てくると考える。

(ウ) 学校支援ボランティア養成講座

保護者や地域住民の中には、学校の教育活動は教員が行うもので、学校支援ボランティアとして自分の資質は不十分だと考え、遠慮している人たちも依然として多い。そこで学校支援ボランティアを導入する意義や効果を知らせるとともに、保護者や地域住民を対象にボランティア養成講座を開講し、学校支援ボランティアとして自信をもつていただく必要がある。講座では、学校評価に基づいて学校の実情を明らかにしながら、学校側の願いを伝えるとともに、学校支援ボランティアの経験をもつボランティアから感想等を話してもらい、保護者に参加することのよさを知ってもらう。そうすることで、学校・家庭・地域が協力し合うプラス面を保護者や地域住民に

理解してもらえ。その結果、学校・家庭・地域が互いに何でも言い合える信頼関係を築き上げながら、学校を中心として、地域の活性化が図れると考える。

(エ) 諸会議運営の効率化

学校支援ボランティアを導入するに当たっては、教員同士のきめ細かい事前打合せが重要である。そこで、会議を効果的・効率的に運営するために、会議運営のチェックポイント（図5）を作成した。このチェックポイントを踏まえ、例えば、職員会議では、各部会の持ち時間を設定し、議題を取捨選択すれば、会議の時間が短縮できる。また、各部会からの報告だけであれば、朝の打合せですませる。さらに、議案書は前日までに全教員に配布し、目を通すようにすれば、質疑や意見交換の時間を多くとることができ、会議そのものも活性化し、会議への参加意識も高まる。参加意識の高まりによって、内容の濃い会議になり、効率も上がる。一方、会議の性質や議事内容を考慮して、参加者をできるだけ絞り込むなど、軽重を付けた運営に心がける。場合によっては、適当な教員の交代参加によって学校支援ボランティアとの打合せを優先させるなど、柔軟な対応を講じることも検討する。また、設定された会議だけでなく、非公式な話し合いの中で情報伝達や意見交換が可能な場合もある。こうした非公式な話し合いも活用していくことで、設定された会議の効率化を図ることができる。

会議運営のチェックポイント

1. 報告することは何か。
(一番伝えたいことは何か。)
2. 協議することは何か。
3. 決定することは何か。
(誰が、いつまでに、何を、どのように、どうするのか。)
4. この会議への必要な出席者は誰か。
(出席者を減らそう。)
5. この会議は本当に必要か。
(無駄な会議はやめよう。)
6. 無駄な配布物はないか。
7. 議案書は、会議前日までに配布したか。

(カ) 実効ある校務分掌組織への改善

学校支援ボランティア導入をスムーズに行うためには、校務分掌組織を見直さなくてはならない。まず、仕事量を振り返り、原則として仕事量の少ない分掌については、統廃合を考える。そのために、会議や朝の打合せでの議案件数など情報発信量やその仕事にかかわった人数、会議にかかる時間などを記録しておくことが必要である。さらに、管理職として、全体の校務分掌を見渡し、校務分掌を決めるときには特定の教員に仕事が偏らないように配慮する。もう一つの観点として、学校経営方針や学校教育目標から校務分掌の統廃合を検討する。外部からの要請や指導により設置を義務付けられている校務分掌もあるが、そうでない場合、業務推進の効率化を考えつつ関連した校務分掌が引き受けるようにし、統合していく。校務分掌を整理することによって、分掌事務の効率化を図り、分掌事務にかかっていた時間を削減することができる。また、定型化された文書事務などはデジタル化して教員間で共有することで効率化を図ることができる。こうして生み出された時間を、児童とかかわったり、学校支援ボランティアとの打合せや教育活動の準備に充てることができる。そのためには、管理職を含め教務主任等のミドルリーダーたちの学校経営に対する意識改革が一層重要になってくると考える。

図5 会議運営のチェックポイント

5 研究結果と考察

学校ビジョンを明確にして、教育活動を創意工夫することで「魅力ある学校」を創出できると考え、学校支援ボランティアの活用を研究した。その結果、次のことが明らかにできた。

①特色ある教育活動を展開しながら、魅力ある学校づくりを進めていく上で大切なことは、教員の

学校経営に対する意識改革を図っていくことである。

- ②学校経営には、地域の専門的スキルや知識を有する学校支援ボランティアを活用するという視点は重要である。
 - ③学校支援ボランティア導入の手順をマニュアル化しておくことで、教員の共通理解を図ることができる。
 - ④学校運営組織を見直し、学校支援ボランティア窓口を設置することでPTAとの連携が密になり、地域にある学習素材の発掘や人的資源の情報を得やすくなる。
 - ⑤諸会議運営の効率化により放課後に時間的なゆとりを生みだし、児童と接する時間、教育活動の準備や学校支援ボランティアとの打合せに充てることができる。
- などの点が明らかになってきた。

しかし、生涯学習社会を踏まえ、学校にとっても、学校支援ボランティア自身にとっても有益性を考慮した活用方法を考えなければならないことなど課題もある。

6 おわりに

地域住民が豊かな経験、専門的な知識やスキルなどを発揮し、教育活動や環境整備等の支援を行う学校支援ボランティアを活用することを通して魅力ある学校づくりを考察してきた。学校支援ボランティアの活用で、児童にとっては興味・関心が高まり、教員にとっても資質の向上につながるなどの相乗効果が考えられる。今後も、学校支援ボランティアを活用した魅力ある学校づくりに、積極的に取り組みたい。

参考・引用文献

- | | | | |
|----------|-----------------------------|---------|-----|
| (1) 宮川八岐 | 奉仕・体験活動の基礎・基本 | 教育開発研究所 | 平15 |
| (2) 木岡一明 | 教職員の職能発達と組織開発 | 教育開発研究所 | 平15 |
| (3) 高階玲治 | 職員会議・各種委員会を成功させる
40のポイント | 教育開発研究所 | 平15 |
| (4) 玉井康之 | 「特色ある教育活動と学校経営」 | 教育開発研究所 | 平10 |
| (5) 今谷順重 | 「外部人材の活用」を実践から学ぶ | 教育開発研究所 | 平16 |
| (6) 北神正行 | 新編 教務主任読本 | 教育開発研究所 | 平16 |